

---

# 妖怪恋物語

ゆうた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖怪恋物語

### 【Nコード】

N9863Y

### 【作者名】

ゆった

### 【あらすじ】

吸血鬼の男の子と普通の女の子が織り成すバカな小説です

## モノローグ

「おはようございます 式羽<sup>にわ</sup>智美<sup>ともみ</sup>といいます 今月この学校に転校してきた者です 宜しくお願い致します」

「そう言っていると私は頭を下げた

お父さんの仕事の関係でこの学校に転校してきた 転勤だったのかな？  
そう言っただけで本当は島流しなのだ

島まで流されたわけではないけど

まゝド田舎だ ウン

「ん、式羽は左から2番目の一番後ろの席に座ってくれ  
これからHR<sup>ホームルーム</sup>始めるぞ」

前の席の人は銀髪 赤眼の男の人だった

(不良かな?)

「あの……おはよう?」

「ああ おはよう」

につこりとおはようと返してくる

「部活は?」

「テニス」(幽霊部員でしょ)

「趣味は?」

「夜遊び」(やっぱなあ)

「性格は?」

「おとなしい」(嘘付けっ)

「好きな食べ物?」

「ん……肉かな? 特にレア」

これらのことが今日聞き込みをした結果だ ウン悪くない

この人はあまり悪そうな人ではなかった 先生に「なんで銀髪なんですか?許してもいいんですか?」

と聞くと「あの子のは地毛だよ それにあの眼もカラコンではない

らしい」

すごい人も居るもんだ

私は前の学校でもテニス部に入っていたので一応テニス部に入部  
偶然？奇遇？

部活の時間になるとまず例の子に話しかけた　　そういえば名前聞いていなかったな

「こんにちはっ！　お名前は？」

「……俊咲輝也しゅんさくてるや」

「輝也君だね覚えとこ」

「苗字で呼べ」

「えー 名前のほうがいいと思うよ？」

「それとー俺に付き纏うな　痛い目にあうぞ」

「えーなんで？」

そういうとさつきからクスクス笑っている女の子グループを指差した  
指差されたグループは一気にシーンとなって四散した

私はその中の一人を捕まえて簡易事情聴取を執ることにした

## モノローグ(2)

「いや 少し話を聞いてもいいかなー？」

「いえ あの その」

私は小動物系というんだろうか？ かわいらしい女の子を壁に当てて脅している

ウン はたから見たら普通に変体行為だね

「まずは……なぜ笑っていたの？」

「いやあ……その……あの……グループでそうなってるんです」  
「？」

「リーダーみたいな人がそう言うのと逆らえないんです」

「中心人物は？」

「い………言えません！」

「ふうん？」

「ひっ！？」

私はその子を連れて（手首を後ろで縛って）私が思い当たる女の子のところへ連れて行った

「やつ 弔さん<sup>とむらいさん</sup>」

「ああ 弔羽さんか 部活は？」

「サボってますひとつ質問していいですか？」

「なに？」

縛られている女の子はじつとしている

「この子の仲良くしているグループのリーダー的な人って知ってる？」

この人は学級委員でクラスのこととはよく観察していると先生が言っていた

「うーん 御木本さんかしら？」  
<sup>みきもと</sup>

「っ！」

核心を突いたようだ

（1時間後）

「あら？ 式羽さんじゃない　なんで樽谷さんの手縛ってるの？」

「あなたに話があつてきました」

私は手枷を取つて離れた　すると一目散に逃げた

「なにかしら？」

「輝也君のことです　なんであなたの仲良ししているグループで避けてるんですか？」

「そこまではれちゃってるの……」

「答えてください」

「フられたからよ」

「……それだけ……ですか」

「そうよ」

「あなたが？」

「そうよ」

「好きだったんですか」

「そうよ」

「今は？」

「関係ないわ」

「そうですか」

「それで？あなたが言いたいことはこれだけじゃないはずよ」  
「……」

この人も私のことをよんでいるみたいだった

「言いなさいよ」

「輝也君を阻害するのはやめてください」

「イヤよ」

「え？」

「イヤよ絶対イヤ」

「なんでです？」

「私をつつたから」

「……それじゃああなただけ阻害すればいいじゃないですか  
あなたのおかげで輝也君が肩身の狭い思いしてるんですよ！？  
あなたの影響力を考えたことあります？

学校全体が一人を阻害したらどうなるか分かりますか！？」

私はいつの間にか怒鳴ってしまった

前の学校では人前できつぱり言いすぎていじめられていた過去がある  
どこかフラッシュバックしてしまったのだろう……

「あなたの言いたいことは……わかった」

そう言っでなんとなく反省した顔でどこかに消えた

部活終了の音楽がながれている 10月のことだった

10月4日

「おはよお」

「おはようございます」

学校での輝也君への阻害がなくなった2日後

1日1回じゃすまないほど告白されているらしい　すごい……

しかもその一人目が弔さんで阻害が始まったとい経緯だ

「おはよっ」

「んーおはよー」

私とはみんなとは違う挨拶方法なのだ　理由は簡単　私が助けたからである

「その　言いくいけどありがとな？　お前がいなきゃ自殺してたかもしれない」

「いいっていいって　その代わりちゃんと周りの人と目を合わせて会話すること」

「うん　お安い御用さ」

ガラガラッ

「おはよう　みんな席に着け」

ガヤガヤ

ホームルーム

「HR始めるぞお」

来て初日に思ったのだがとんでもなくゆるい先生だ　年齢は……20台だな絶対

朝のHRが終わった次の授業は美術

私の好きな科目なのだ

「なあ　あの　教えて？その……美術」

「へ？」

「もうすぐ期末じゃん」(一ヶ月あるよ……)

「うん？　まあいいけど？」



「ありがとう！」

うわあ聞いていた周りの女生徒の視線が痛い　私は逃げ出すように美術棟に向かった

《一時限目　美術》

「きりーっ　きおつけーれー」

「おねがいしまー」

ガタガタと音を立てて座った

全くゆるい中学校だ

「はい　それでは勉強を始めていきたいと思います

まず　美術資料P39を　」

私は熱心に聴きながら輝也君に教えていた

「それじゃあ　ここを　式羽さん」

「は！？　はいい！？」

あははと声があがる　声が裏返りまくってしまった

「……私語を慎みなさい　美術資料P39　『最後の審判』の作者」

「ミケランジェロ」

「ご名答　どこの協会に作られたかを　栗山君」

「バチカン市国」

こんな感じに授業は進んでいった

ホームルーム  
《帰宅前のHR》

「はいHR始めるよ」

前で輝也君が死んだ顔をしていた勉強は終わった  
もう私が教えたことは完全に覚えたみたいだった  
授業そっちのけでやってたからなあ

「はいそれでは解散　起立　きをつけ　礼」

「ありが　」

授業のときより早い！？

「部活いこっか」

「うん」

## 《部活》

私は実質 部活は1日しか出ていない

顧問は氷羅先生 女だ

「はいはい（手をパンパン）まずは組でラリー」

「はい」

私の相手は和田さん 和田さんが後衛で私が前衛  
少しソフトテニスのことを触れないといけない  
ソフトテニスとは基本ダブルスで行う

基本的にこのようなポジションをとる

- ・ 2人とも後ろの『ダブル後衛』
- ・ 2人とも前の『ダブル前衛』 これは基本中学校ではない
- ・ 1人前 1人後ろの『基本ポジション』 名前はない

殆どの組は最後の『基本ポジション』だ

ネット前につくのが前衛 後ろのサーブラインでボールを打つのが後衛

前衛は前でスマッシュ・ボレーでトドメをさす役目

後衛は後ろでチャンスを前衛に作る役目になる

私は1：1のラリーではサーブラインより1歩後ろで打ち返して相手も同じように打ち返す

そうして ラリー 前衛練習 後衛練習 サービス 生理運動  
コート整備 解散

## 《帰宅後 家》

疲れた

「ただいま」

「おかえり」

母さんが家にいた

かえってすぐ風呂に入ってご飯

あしたの準備と宿題しなきゃ

時間割を見る 筆箱を開き中身を見る シャープペンシルを出して

カチカチッ

「アッ あー シャーペンの芯買ったの忘れてた

かー……さん」

「なに？」

「105¥也」

「文房具？」

「シャーペンの芯」

「ん」

私は夜8時に家を出た 女の子だけど変わらない……よね？

そこで私は“本当”の輝也君を見ることになったんだ……

10月4日(2)

ガシャリンと自転車をストッパーの拘束から解き放つ  
シヤアと走り漕ぐ

「ううう 寒い！」

100均一(105円均一)に到着

ちゃんとあるんだな 100円均一

ここの閉店時間は…… 10:30!ダイジョブだ

文房具の棚からシャーペンの芯を取って買った

帰ろうと自転車に乘ろうとしたその時

「？」

私は街頭の上に人が座っているのを見るのが初めてだった田舎人は  
みんなするのかな？

いや無理だろう

「だれ？」

「……俊咲 輝也」

「うそ……」

見た目は全然違った短かった銀髪は長くロングヘアに

眼はもともと赤かったのに真ん中に切れ込みの黒い線が入っている

「本当だ 貴様は？」

口調も違う

「私は式羽智美」

「ふむ 昼のクラスメイトか」

……感じが違う

「あなたは本当に輝也君？」

「そうだ どこか違うとも思ったか？」

「性格 見た目」

「ふむ いいところを突いてくるそうだな俺は夜と昼とで人格が違う」

「え？」

ヴァンバイア  
「吸血鬼は日光を浴びると弱くなると知らないか？」

ヴァンバイア  
「吸血鬼……！」

「そう吸血鬼だ 朝の7:00〜夜の7:00まで昼の人格  
夜の7:00〜朝の7:00までは俺の時間だ  
そして人格が変わると同時に風貌も変わる」

「信じられない！」

私は自転車に飛び乗って逃げた

輝也はフウと息をついた

S A I D : 輝也

俺はため息を漏らした

やはり人間と非人間は相容れられないものなのだろうか  
話しかけられたことは正直ビックリした

昼の人格に夜話しかけてくるような人物はいないはず……  
どうしようか本性ばらしてしまったな

……追いかけるか

タツと8mの電灯から飛び降り、地面を一蹴りした

パアンと地面が鳴り上空20mを空中飛行した

1歩で間に合うと

「なんで逃げる？」

「……今どこから来たの？」

「質問に答えろ」

「あなたは輝也君ではありません」

「なぜ？」

「格好が違うから」

「説明はした」

「私の知っている輝也君はシャツのボタンを3つも開け放したりし  
ません」

「この方が楽だ」

「じゃあいつも学校で我慢してるんですね？」

敬語だな

「人格が違う 昼の奴がどう思おうと勝手だ」

「<sup>ヴァンパイア</sup>吸血鬼なんか信じません」

「そうか 残念だ」

俺はまた地面を蹴り向こうに見える山へ足を向けた

山でなくてもよかったどこでもよかった

ただ<sup>ひとけ</sup>人気のないところへ行きたかった

10月4日(2)(後書き)

加筆しました

10月5日

「……」

私の目の前の人は眼はいつもと同じく赤いだけ 黒みがさしている  
昨日は真っ赤今日は赤黒い 髪はばつさり切った模様

「……」

二人とも二人共に話しかけない 昨日の事があったからだ  
そだそだこれがあった

「おりゃ！」

私は用意したロザリオ？十字架？をあててみた

「ぐああ！？」

ジュウウと焼ける音がした

「いつてえ！？」

「あはー ゴメンゴメン」

「それは ロザリオ？」

「あーうん 昨日の事があったから実験」

「昨日……ね」

「なんで焼けるの？」

「焼けているわけじゃない 肉体が嫌がってるんだ」

「へー……それじゃあ 本物なんだ……ね？」

「うん」

「へー……他の子には秘密にしておくよ」

「ありがとう そのーこんな体だしあれ？嫌悪する？」

「……少しは変わるかも」

「そうか」

今日は何事もなく部活になった

《部活》

「はいはい（両手をパンパン）組でストレッチしてからラリー！」  
ダブルス



「はい」

パーン パーンと音が鳴る

「ちよつと式羽さん来て」

「あ……はい」

《顧問部屋》

「あなた来週の試合出る？」

「え？ ハイ！是非！」

「予定とかは？」

「いえありません」

「そう それじゃあ来週の15日、日曜ね」  
そう言つてプリントを渡された

「部活に合流なさい」

こうして一日は終わった

10月15日

「ふう」

私以外に、和田さん、別ペアの美東さん、東さん、蝶日さん、鳥野さん、戸曾<sup>とひい</sup>さん、霧<sup>きり</sup>さんの4ペアだ

男子も来ているのだが名前がいまいち覚えられない

輝也君の組<sup>ダブルス</sup>ペアは相手は井町<sup>いまち</sup>さんだ

『開会式を始めます 選手の皆さんは第1コート〜第4コートに集まってください』

「開会挨拶」

「〜省略」

「審判の説明」

「本大会は日本テニス連盟公式ハンドブックより〜省略」

「それでは試合のコートを発表します」

この大会はトーナメントである

「〜式羽・和田ペア 第14コート」

「いこう」

和田さんは超無口キャラだ

「うんっ」

相手は仙崎中学校のエースペアだ

「礼！」

「おねがいします」

「トスしてください」

「ジャンケンポン！」

「表でお願いします」 私

「裏お願いします」

負けたほうがラケットを回転させて地面に落とす

「表です」

「レシーブお願いします」

「乱打お願いします」

乱打とはラリーの練習である

「レディ！」

レディとは女の子という意味ではない 「やめてください」みたいな意味

「5（ファイブ）ゲームマッチ プレイ！」

上からのサーブ 和田さんがレシーブ

和田さんは後ろについて私はラケットの根元と先を持つ

相手がストロークを打って来る

ボレーをする 結構これで決まるのになあ

なんとか返される

和田さんの握りが違う……基本がウェスタングリップで和田さんは

イースタングリップだ

理解した カットだな

カットとは回転をかけてバウンドを変化させる打ち方である

ザシュッと逆回転がかかり敵はそのバウンドを見切れずロビング

ロビングとはロブのこと ボールをあげる（上に打つ）山なりなボール

それを私は渾身の力をこめてスマッシュ！

「セイツ！」

相手の意表をついてこの点<sup>ポイント</sup>は頂いた！

……がんばれば勝てるかも……

10月15日(2)

『表彰式を行います』

省略

女子個人・優勝 水戸・美談ペア  
準優勝・式羽・和田ペア

私達は結局決勝戦で負けちゃった……

「和田さんっ 惜しかったね!」

「……うん」

返事しないのか……と諦めたその時言うからな……分からないんだよね

……男子個人優勝・俊咲・尾田ペア

輝也君は圧勝だもん……凹む……

これにて表彰・閉会式を終わります』

「さあさあ(両手をパンパン)準備してー 帰るわよ」

私達はバスに乗せられて来たのだ

バスの中では

「式羽ちゃんすごい」とか

「和田さん カットうまいー」とか

「俊咲君かっこよかったー」とか

みんな口々に囁し立てている

《校庭》

「はいはい(両手をパンパン) バスに忘れ物はない? いいね? それじゃ私の所見を3つほど

1つ目は和田さん、カットは強いかもしれないけどこごぞというときだけ使わなきゃ

武器にはならないわよ

2つ目は全員、サービスの特に上からのサービスが入って無い

プレッシャー

これも相手に圧力をかけるいい手段だからサー・レシを練習すること最後に応援の声が小さい 敵チームの声に押されてる

これだけを踏まえて 今日解散」

やっただー

ちなみに男子は顧問が別なので遅い模様

輝也君を見て見返されて私は目を逸らした

真っ赤になって逃げるように帰る

あんなことしなきゃよかった

時間は遡る

《試合テニスコート 第3コート 応援席》

私は輝也君の試合を観戦していた とても声は出せない

周りに人が居過ぎて恥ずかしい

輝也君は後衛でなんとか踏ん張っている

ポイント

デコース

この点を取れば3：3取れなければ4：2でゲームを取られて負けになる場面

ハラハラして試合をみんな観戦していた

その時敵チームがカットをかけてきた

それを私は気付いて思わず

「輝也君！ 気をつけて！！」

と特大の大声で叫んでしまったのだ

それで輝也君は1歩前に出ておかしいバウンドに対応できるところにいったのだ

試合が終わった後に真っ赤になっている私に

「応援ありがとな。 お前の声がかんきや 打ち返せなかったよ」

「ッー!!」

と撫でてきたのだ

やばい……と逃げ出してきたのだ 周りの女の子の視線がいたい  
それからちようと逃げた先で私の試合があつたのでそれ以来顔を合  
わせてないのだ

《学校からの帰り道》

「はあ……」

10月も半分が過ぎ6時となればもう暗いのだ  
コロンと石ころを蹴った

思い出しても赤面し思い出しても赤面する

黒歴史認定だよお

10月15日(2)(後書き)

この度題名を変えました

10月16日

「おはよー」

「おはよう」

今日は輝也君机に伏している　なぜか耳まで真っ赤だ  
風邪でもあるのかな？

でもこの前のこともあるし……話しかけられない

「式羽先輩　少し話があるんですが」

「……誰？」

「1年の寺我と申します　二人称はなんでもいいです」

ガバツと輝也君がこっちに向いてきたがすぐに元に戻った  
「お時間は取らせません」

《校庭：部室倉庫裏》

「話というのは簡単な質問です」

「なに？」

「では2つほど……妖怪は信じますか？」

「……！　信じる」

「それでは　俊咲先輩の正体を知っている？

あれですよ吸血鬼バンパイア」

「……！」

言ってもいいのだろうか……

「知ってるわ」

「そうですね　それでは最後にひとつ付け加えましょう  
吸血鬼以外にも妖怪はいます

気をつけてください　また会うことを……」

そうつと歩いてどこかへ消えた  
なんだったんだろう？



《1時限目 数学》

なんだろう？ 聞いたほうがいいかな？

「輝也君？」

「……」

無視かな？

「あなた以外の妖怪はこの学校にいるの？」

「……」

また無視されたっばい

「それじゃあ質問を変えるわね 妖怪は吸血鬼バンパイア以外どんなのがいるの？」

「……」

「ちよつと？」

後ろから服を引っ張ってみた

「うわあ！？」

「十字架ロザリオあてるわよ？」

「スミマセン それだけはお許しをー」

スッパーン！ 輝也君の後頭部にチョークが直撃！

「私語を慎みなさい」

「「はい」」

事は3時限目に起こった

《3時限目：保健の少し前》

今は授業と授業の間にある休憩時間、つかの間のひと時である

私は水筒から暖かいお茶をズズツと吸った これがなんともいえない……

すると私を……いや学校をとんでもない瘴気が襲った！

この感覚 あの夜に似ている……

『出て来い 俊咲』

「！」

輝也君はビックリしたようだがすぐに気を取り戻しキッと目つきをきつくした

すると夜限定のハズの吸血鬼<sup>バンバイア</sup>の人格を表に出した

「フン……3下が」

すると口調が一気に変わり目には瞳孔の黒い線、

あるときには気付かなかったが犬歯も相当伸びている

髪の毛はいたって普通だ

「どけ」

窓に足をかけると次の瞬間一陣の風が吹き荒れた

目をやると其処にはもう誰もいなかった

10月16日(2)

「寺我 なんのようだ」

「知っているくせに よく言いますね、弐羽さんの奪還ですよ」

「フン 俺はどうでもいいがそれも任務だからな 弐羽は俺が守る」  
「できますかー？ あなたに クスクス」

チツ 実戦は久方ぶりだ

「死ね！」

俺は爪を俺の力で引き伸ばし1m30cmはあるだろう そしてよく切れる

ジャンプして間合いを詰めて斬りをかます

「フフ」

真つ二つになったが幻影だった

「私の正体を忘れちゃったんですか？ 悲しいですねえ」

「…… 生成り（ドッペルゲンガー）……」

「そうです 生成り（ドッペルゲンガー）です

人生を盗み自分のものとする妖怪

幻術に長けているんですよ？」

「フン！ 戦闘能力は並みの妖怪より低いしな」

「あなたはもう私の手中にハマってますよ？」

俺の視界が揺らぐ 膝から地面に突く

「グッ！？ウワアア！！？」

俺は叫んだ 叫んでも叫んでも叫びきれなかった

「グッ うっ……」

妖力でなんとか跳ね返す

「幻術だけで言う<sup>サキユバス</sup>と夢魔の次ですからねえ」

「ぐうう」

俺は髪を全力で伸ばした

「はーはー」

銀髪は地面に届くほどだ

そして背中の制服を破って翼を引っ張り出した

俺の視界には寺我がいない

ブワツツと羽を使って空を舞う

「逃げるつもりですか？」

ふふ 生成り（ドッベルゲンガー）の固有能力って知ってます？」

「他の生き物と同じ姿、能力をコピーできること」

「よくしってます……ね！」

まさか蠅になっっているとは！？

うしろで俺に化けた寺我が襲ってくる

「フン！」

鋭い羽で千切りにした

「ご……ふっ！？」

死んだな……

「まさか……そこまで翼を扱えるとは……思いも……ゴフッ」

7枚にスライスされた寺我は口から血を吐き落ちていた

翼を縦に振り血を落とした

ブウーンとその7枚にスライスされた寺我が消える

「んな！？」

「幻影ですよ」

後ろに回りこまれ生成りドッベルゲンガーの爪が俺を切る

「ぐあ」

鋭くはないので腕にザックリいった

これは実体がある！

「おらあ」

俺は爪で思いつきり横から斬りつけた……が斬る瞬間に幻影を作って逃げた

「ふう 手強いようね」

「！ 弔！」

「手を貸してあげましょう」

「お前……来るな！邪魔になるだけだ！ 第一妖怪でも……」

「私は夢魔サキュバスよ この程度の幻術なら破れる……わ！」

パリーンと俺の背後にいた寺我が頭になった

「くっ」

「幻術縛りをかけたわ 今から私が念じている間そいつは幻術を使えない！」

「オッケー！」

俺は弔に向かう寺我を背中から切りつけた

「が……」

今度こそKOだ

「くっ この学園に2人も妖怪がいるとは……親方様に報告せねば」  
そう言つて消えた

「！幻術は使えないはず」

「移動術なら使えるわよ 私はあくまでも幻術を封じたんだから  
それと 私は諦めてないわよ！」

すると後ろから抱きつかれたまったく……このような経験は皆無だ  
という事で人格を元に戻した

視点：弔羽

「んなんなんなんな」

目の前では輝也君と（熟睡）超ハッピースマイルで抱きついている  
弔さんがいた

「あら？弔羽さんこんにちは」

「まだ朝です それとー 輝也君から離れてください！」

弔さんを引き剥がすと熟睡している輝也君を見た やばい 何も出  
来ない

「保健室にでも連れて行くわよ」

そう言つて指を振ると体が浮上して連行された

「あなたも……」

「恋の妖怪・夢魔サキュバスよ よろしく」

「あ……あははー」  
私はへたり込んだ何でもありだわ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9863y/>

---

妖怪恋物語

2011年12月1日21時55分発行